美浜区磯辺

全世代の交流場所を目指して

新たな地域コミュニティー拠点「くるみplus＋」オープン

来年春の本格的始動に向け、9月から実証実験を兼ねて磯辺1丁目にオープンした「くるみplus＋」。要支援対象の半日型デイサービスをメインに、今後はさまざまな地域活動の拠点となる予定だ。「くるみplus＋」という名称は、地元で愛されて続けてきた同じ敷地内の地域活動支援センター「くるみ」に由来している。

運営母体の㈱ヘルパーリンクは、高齢者のお困りごとなどに対して、近所の登録サポーターが駆けつける「ヘルパーリンク」というマッチングサービスで実績を積み上げてきた会社。2019年に千葉市で開始後、ニーズが増え続け現在は船橋市にまでエリアを拡大している。利用開始前に利用者とサポーターと会って、人となりを理解した上でマッチングさせることから、昔ながらのご近所づきあいなど対価以上のものを生み出してきた。代表、樋谷祐希(ひだにゆうき)さんによれば、この事業を通して知り合った人たちが「くるみplus＋」の立ち上げにも協力しているという。

介護認定者のなかでも特に多いのが要支援1と2で、一部介助が必要でも日常生活上の動作がほぼ自分でできるため、使える介護サービスが少ないのも課題だった。そこで「くるみplus＋」は要支援を対象に1日3時間程度利用できる「通いの場」として、健康維持・促進や身体機能の低下を予防、地域交流を目的につくられた。対象エリアは近隣の千葉市美浜区磯辺、真砂、高浜、高州、打瀬付近。また、介護認定を受けていない人でも1回あたり3300円で利用できるという。

「くるみplus＋」のコンセプトは食。「食でつながるミニデイ」をテーマに、管理栄養士による旬の食材を使った手づくりのランチを提供。食材はスタッフが育てた野菜や、飼育している鶏の卵など、鮮度や安全性にもこだわっている。「食事を作るのが面倒でお弁当やインスタントばかりという方、独食で寂しい方は、ランチだけでもぜひ利用してもらいたい」と話す。

メインのミニデイサービスの特徴は自由度が高いこと。健康チェックや体操は毎回実施し、それ以外の時間はお茶飲みおしゃべり会、フットケア、ハンドケア、足湯サロン、ものづくり&手仕事クラブ、スマホで脳トレ、スマホ教室、みんなで買い物ツアー、健康相談など利用者それぞれがやりたいことができる。

さらにオプションで各種パーソナルケアも受けられ、通うことが楽しみになる工夫も。「特に認知症予防には人との触れ合いは欠かせません。運営スタッフには看護師や介護経験者もいますので安心して通ってください」と樋谷さん。また、利用者やご近所の人が困ったことがあれば何でも相談できる窓口として使ってほしいとのこと。内容によってヘルパーリンクのサポーターや提携している専門業者へ取り次ぎをしてくれる。

支払いには専用ICカードを導入。ポイントを貯めたり現金チャージも可能で、食事や商品購入に使用できるほか、子どもはお手伝いでポイントを加算して商品と交換できるユニークな仕組みもあり、新たな地域通貨としても注目したい。

建物は介護施設というような大掛かりなものではなく、2階建ての一軒家をスタッフがDIYで内装を手掛けているので、まるで近所の家にお邪魔しているようなアットホームな雰囲気だ。中心となるスタッフは主に30代。元気で明るく、優しく接してくれる。

今後はここを拠点として、ショップ、駄菓子屋、居酒屋、子ども放課後スクール、一箱本棚、農業体験、スマホ相談所、子育て世代の居場所、障がい者ワークホームなどを展開していく予定。一般的にこのような地域活動はそれぞれの場所で行っていることが多いが「くるみplus＋」では、すべて一か所で実施していくという。地域づくりから福祉まで、人が関わる間口を広げることで世代関係なく立ち寄る場所になってほしいとの思いだ。

多様な人が集まれば集まるほど、シニア世代が得意分野を生かして活躍する場など新たなアイデアを思いついたり、人と人をつなげることで地域に必要な活動が生まれると樋谷さんは考えている。「私たちがやろうとしていることは特別なことではなく『近所にこんな場所、こんなサービスがあったらいいなあ』を一つずつ実現して、より住みやすいまちになるようお手伝いすること。全世代がミックスするような交流場所が理想ですね。まずは磯辺でモデルをつくって同様の拠点を千葉市内へ展開したいと思っています」と意欲的だ。

ご近所付き合いが減っている現代に、地域に拠り所をつくり住民同士が触れ合う機会を増やすことは、高齢者の安心や生きがいにつながるだけでなく、まちの魅力アップや防犯、スペースの有効活用で空き家対策にもなるだろう。そして「くるみplus＋」に集う人が今後の活動の肝になっていく。

「くるみplus＋」では、ミニデイサービスの利用者を募集中。施設見学希望者は電話で050・5530・1405まで連絡を。

随筆

思い出の秋の日

吉成庸子

日、一日と秋が深くなるのを感じているここ何日かだ。

少し前の休日珍しくいすみ市へ数人の友人と出かけた。太東岬の灯台の近くの丘へ登り、はるか向こうまで続く海を観ているうちに、儀ちゃんが他界する一年位前に、一宮町で町会議員をしていた志田延子さんの軽自動車に乗せてもらって私の希望もあって、岬方面を回ったのだった。

私は子供のころからとても可愛がって頂いた青木半治小父さんが、お亡くなりになってしまったがこの地のご出身と聞いていたので、ぜひ訪ねてみたかった地だった。

青木さんは儀ちゃんとの結婚の時父親替りをして下さった方だ。岬めぐりの途中で偶然、鰯祭りにおいでになっていた当時の九十九里町長の川島様や県庁の方々にお会いした。

皆さん輪になって、豊かな海の幸をつまみに酒盛りをしていた。誘って頂くままに儀ちゃん以下私達も合流させて頂いた。「私は昼は酒は飲まないんですけどねえ」なんて言いながら儀ちゃんは最初はビール、次は日本酒と気持ち良さそうにどんどん呑んだ。

そして川島様始め皆さんとそれは楽しそうにしゃべっていた。海の香り、秋の陽の下、思いがけない知り合いの方々とのぐうぜんの酒盛り、儀ちゃんにとってはめったに無い楽しい時間だったのだろう。亡くなる前に何度か口にしていたものだ。あの日はまだまだ居残りしたそうな儀ちゃんをせきたて、志田さんの車に乗った。志田さんは結婚後全盲になってしまったご主人と二人のお子様を育てがんばってきた人。残念にもご主人は他界されてしまったが、なかなかのがんばり屋さんなので、儀ちゃんがけっこう目をかけていた。

庭仕事の好きな儀ちゃんが休日一人で草取りをしていると、突然志田さんがやって来て一緒に草むしりをしてくれた事もあったっけ。そんな理由で、一人でがんばっている志田さんになにかと声をかけてあげていた。

鰯祭りの場に心を残しながら予定通り「えびす家」さんに行き、儀ちゃんの念願のぶりの甲煮を食べた。旧山田町仁良出身だが中学校は銚子商業。魚大好きだったが、なかなか料理下手な私には彼の満足する料理は出来なかった。だから儀ちゃんは「お母さんの料理は作るんじゃなくて、並べるだけだね」とか、「お母さんの作るカレーライスはゆでるんだねえ」と皮肉ばかり飛ばしていたっけ。

そんな儀ちゃん大好物の「ぶりカマ」をたっぷり食べて、ご満悦。また志田さんの車で帰途に着いた。山道、グッタン、グッタン、車は大きくゆれて身体が前後左右に動く。志田さんが気をつかって「すいません。車も運転も悪くて」と言った。儀ちゃんが「なあに軽はいい車ですよ。私も支店長の頃はカローラに乗ってお客様回りを毎日してたもんですよ。運転も私は非常に荒っぽかった。この位のゆれは、平気、平気」と上機嫌だった。

少し昔のそんな一日を思い出しながら、目の前にひろがる広い広い海をいつまでもながめていた私だ。志田さんは今月議員を引退した。儀ちゃんが生きていたら、長い間ご苦労さんと言ってあげただろうに。

次回発行日　12月2日（金）

身近な情報はメール・FAXでお寄せください

秋晴れの下「通町門前市場」開催

去る10月23日(日)、千葉神社脇の通町公園にて「通町門前市場」が開催され、秋晴れの下、グループや家族連れでにぎわっていた。

「通町門前市場」は通町公園利活用社会実験事業の一環で、「歴史と暮らしを感じる癒やしの通町公園」をテーマに開催されている野外イベント。季節のグルメからショップなど工夫を凝らした出店が好評だ。

今回は新鮮な地元野菜と勝浦直送の干物の即売会や、茶そばやカフェのケータリング、たこ焼き、綿あめ、射的、輪投げなどの屋台が集まり多くの人を楽しませていた。

昔懐かしい「紙芝居」は、終わったとたんに子どもたちから「もう1回見たい」とリクエストが出るほど人気。ほかにも移動図書館、地元名店による和菓子や高級抹茶の販売やワークショップ、インストラクターによるヨガレッスン、アーティストによるアクセサリー販売など、出店はバラエティ豊かなラインナップでイベントを盛り上げた。来場者のなかには、千葉神社での七五三詣の帰りと思われる、晴れ着姿の子どもと親御さんが寄り道を楽しんでいる様子も見られた。

同日、近くの中央公園ではミュージック&アートフェスティバル「GONJA CHIBA2022」が開催。千葉にゆかりのある若い表現者たちが集い、ミュージシャンによるライブや地元のアーティストによる作品展示販売が行われていた。イベント同時開催の効果もあってか中心市街地は普段の週末よりも人出が多かったようだ。

新連載　ローカル小説

「退屈な人」

前編　草野くれよん

「行ってきます」

「行ってらっしゃい、高志さん」

出勤のため家を出る夫をいつものように見送ると、千夏はすぐにいつもとは違う行動を取り始めた。身の回りのものをカバンに詰める。必要最低限の生活用品と財布、結婚前から持っている自分名義の預金通帳。いまはこれだけでいい。仮の支度としては十分だ。

この朝、千夏は高志から逃げる――ことになっていた。

流れで、そうなってしまった。実際には、逃げる必要などまったくない。夫婦仲は円満そのもの。高志は穏やかな人柄で、大声を上げたことすらない。一流企業に勤め、毎日酒も飲まずに真っ直ぐ家に帰ってくる。欠点らしい欠点もない。強いて言えば真面目すぎて退屈な人物であることくらい。だがそこが大きな問題だった。

千夏は自分の夫が退屈な人物であることが悪いとは思わなかったが、美点であるとも思っていなかった。「あの人のご主人、退屈な人なんですってよ」ご近所の奥様方からひそひそと噂され、陰で嗤われていたらどうしようと思う。破天荒までは行ってしまうとそれはそれで困るが、ちょっとくらい教科書通りではない部分があれば、人生の良いスパイスになるのにと思うのだ。

退屈な夫の教科書的な日常に、タバスコ的なピリッとした非日常を一滴垂らしてみたらどうなるだろうと想像すると、千夏はワクワクが止まらなくなるのだった。

「その旦那、大丈夫？　おかしいよ絶対。捨てちゃった方がいい気がするけど」

そう勧めてきたのは、SNSで知り合った「友達」だ。ナミコという名前以外、住んでいるところも知らない相手だが、ふとしたきっかけからダイレクトメッセージのやり取りをするようになり、いまではかなりプライベートに立ち入った相談までする仲だった。

ナミコはどうやら千夏より少し年上の主婦で、夫の浮気に悩んでいるらしい。興信所に調査を依頼したいが費用に不安があるとか、法テラスに相談してみたが当たった弁護士が離婚問題に強い人ではなくて困ったとか、シリアスな話題を隠さずに書いてくる。

千夏は自分だけが平穏そのものの結婚生活を送っていることに何となく申し訳なさを感じ、「私も旦那が変人で困ってる」と調子を合わせた。するとナミコはどのような変人なのか、根掘り葉掘り聞いてくるようになった。後に引けなくなり、「ダンゴムシをガラスケースに飼って繁殖させている」「女装の趣味がある。スカートや化粧品を隠しているのを見つけた」「ラーメンの食べ歩きに無理やり付き合わされる」などなど、架空の嫌悪や被害をでっち上げた。昨夜、「私に腹踊りをさせた動画を撮り、ネットにアップしようとした」と報告したところ、ナミコが激怒し、「天罰が下るレベルの変態じゃないか。逃げなさい。できるだけ早く家を出ろ」と強く背中を押してきたのである。

家出か。ちょっと面白そう。

高志が退屈な夫でなくなってほしいという要望を叶える方法としては、まったく適切ではなかったが、千夏は面白さを優先する欲望に勝てなかった。

「でも、どこへ逃げたらいい？　行く当てがないんだけど」

「実家は？」

千夏は新潟の金属工場経営者の娘だったが、両親とも早死にし、弟が会社を継いでいる。千葉からはちょっと遠いし、もう10年近く帰っていないし、いくらなんでもこんな茶番の失踪劇に愚直な性格の弟を付き合わせるわけにはいかない。

実家には頼れないと言うと、「旦那の両親を味方に付けられない？」と返ってきた。高志の実家など、自分の実家よりさらに行きづらいではないか。一人で顔を出せば怪しまれるだけだし、あなたの息子さんは天罰が下るレベルの変態ですなどと嘘を訴えることもできない。そんなことをしたら大騒動になってしまう。

12月号へ続く

著者　草野くれよん
千葉市の稲毛生まれ稲毛育ち。稲毛在住。筋金入りの稲毛者。好きなパンはマロンド。好きな芸能人はマツコ・デラックス。好きなお菓子は万祝餅（まいわいもち）。愛読書は稲毛新聞。

「ちば富士見屋台横丁」ではしご酒

11月25日(金)26日(土)27日(日)　土日は昼から開店し家族連れにも期待

千葉市ナイトタイムエコノミー推進支援制度を活用し「街を元気に！」

千葉駅前大通りの非日常空間を楽しんで

11月25日(金)～11月27日(日)にJR千葉駅東口前から中央公園や中心商店街に至る千葉駅前大通りの歩道（中央公園プロムナード）に20台の屋台が登場する。富士見町・栄町・中央町への周辺回遊ルートの要所となるこの場所に、地産地消を意識した屋外飲食店舗を設置し、福岡の中洲のような賑わいと、中心市街地への人の流れを創出する取り組みだ。

将来的には屋台を常設化し千葉市の新たな名所を目指すという。また今後、新型コロナウイルスが収束し中央公園を中心としたイベント等が再開される際には連携も期待されている。

「ちば富士見屋台横丁」は、千葉市が実施する地域経済活性化及び夜間における賑わいの創出を目的とした「千葉市ナイトタイムエコノミー推進支援制度」を活用し「r-223」が主催するイベント。「r-223」とは「この街をもっと元気にしたい」という思いから2006年に立ち上げられた民間団体で、富士見町を拠点とする経営者や企業で構成されている。

過去開催時の様子

千葉駅前で中洲風屋台が楽しめると好評の「ちば富士見屋台横丁」は今回で8回目を迎える。開催日時は2022年11月25日(金)16：00～22：00、11月26日(土)12：00～22：00、11月27日(日)12：00～20：00。土日は昼間からの営業とあって家族連れも増える見込み。

千葉市を代表するナイトカルチャーかつ新たな名所となるか、今後も注目したい。各屋台ではコロナ対策が実施されているので感染防止に協力しながら、非日常の空間ではしご酒を楽しんではいかが？